

ハイデガーの思想に一貫する「(本来的に) 存在すること」の動性  
——自己に固有なテロス(再臨、死、性起) へ向かう本来的運動——

貫井隆 (京都大学)

ハイデガーにとって「(本来的に) 存在すること」(Sein) がどのようなことを意味するのか、ということは、解釈者の間でも、そこまで明確なこととは言えない(轟孝夫『ハイデガー『存在と時間』入門』2017を参照)。本論はハイデガーの「(本来的に) 存在すること」に固有なものとして述べられる運動を明らかにし、ハイデガーがこの運動を自身の思想において一貫して重視し続けたことを新たに示す。

ハイデガーの『存在と時間』(1927年刊行)における「死」(Tod)の規定が、1921年講義における「再臨」の規定を継承していることは、これまでの研究においてよく知られている(M. E. Zimmerman, *Eclipse of the self. The Development of Heidegger's Concept of Authenticity*, 1981、齋藤元紀『存在の解釈学』2012)。本論はまず、ハイデガーがこの時期の再臨や死を、ほぼ同時期(1926年)に行ったアリストテレスのテロス論と重ねて考えていたことを新たに明らかにする。

ハイデガーはアリストテレスの「テロスに向かう運動」を以下の二種に区別している(GA (Gesamtausgabe, Frankfurt am Main) 22 203-204)。一つ目は、当該の運動の外にその運動のテロスを持つものである。例えば、テーブル職人がテーブルを製作する場合、テーブルの完成と同時にテロスは達成され消え去り、製作は終わる(GA22 323)。これは「可能態の実現化」としてのエネルゲイアと呼ばれる(GA22 172)。それと対照的なのが、当該の運動の内にテロスを持ち続ける運動である(GA22 175)。この場合、運動は「完全なエネルゲイア」(GA22 172)や「エンテレケイア」(GA22 175)と呼ばれ、再臨や死はこの場合のテロスと重ねて解されていると考えられる。ハイデガーはこの運動を「現存在」(Dasein)が「(本来的に) 存在する」際の運動であるとも述べ、極めて重要視している(GA22 188)。

以上のように「自己に固有なテロスへ向かう本来的運動」を「(本来的に) 存在すること」の運動と解することができるならば、ハイデガーが『存在と時間』の時期に限らず、それ以降もこの運動を自身の思想の中核に据え続けたことも明らかになる。以上の運動の区別は1931年に再度行われたアリストテレス論でも繰り返されているし(GA33, 218等)、この本来的運動は『存在と時間』の時期から一貫して「決意性」の動性でもある(GA38, 77) (1934年)。「中期」思想の主要著作である『形而上学入門』(1935年)でも、存在者が外部ではなく己に由来するテロスに向かうことが「(本来的に) 存在すること」であると述べられている(GA35, 64)。「後期」思想のキータームである「転回」(Kehre)や「性起」(Ereignis)も、それに存在者が向かうことで存在者の本来的存在が可能になるテロスとして見なされていると考えられる(GA79, 71-72 (1949年)、GA14, 28-29 (1962年))。

以上を示すことで本論は、ハイデガーの思想的変遷には同一の本来的動性が通底していることを明らかにする。また、このような「存在すること」は、ハイデガーにとっては、他者と調和的に存在する所謂「倫理的」なあり方でもあることも示す。